

にんげん望遠鏡

森繁久彌

朝日新聞社

森繁久彌 にんげん 望遠鏡



朝日新聞社

屋根の上の拳闘家

一九七九年十月三十日

朝日新聞社

大袈裟おおげさにいうなら、これから生死しやうじの中の二カ月が始まる。

それは十一月から十二月にわたる七十数回の「屋根の上のヴァイオリン弾き」の帝劇公演だ。九月の大阪での一カ月の公演を終わりひと月を休んで、いよいよ二カ月の舞台が続くわけである。

九月の大阪はひとしお残暑のきびしい日々明け暮れた。ホテル住まいも長期にわたると何かと不自由で、自分の家にいるようにはやすまらない。

大阪の夜景がものうく見える高層の部屋で、酒をやめた私はすることもなく、ただ疲れた体を横たえるだけだ。

夜中、またもびつしより汗をかいている——声はどうしても出ないのだ。歌の途中でタンがからんで、声がかすれたとたん一声も出なくなり、オーケストラ・ボックスの音楽はどんどん進む

し、瞬間、お客にお詫びして、もう私はこれまでです——と中止してもらおうか、そんな考えも走る。

汗がとめどなく流れて息が苦しくなる。

たいがいは、いつもそんなところで目が覚めるのだ。

テールに蹴つまずきながらトイレのスイッチを入れ、あわててコップの湯にウガイ薬を入れて、二、三度ガラガラやったところで、どうやら正常にかえる。つまりそれまでは半分眠っているのだ。

アアー、イーイー、ウーウー、夜中に大きな声で発声して、どうにか声が出ると、やっと安心して、またベッドへもぐりこむ。「やかましいナ」一度ならず隣の客から苦情がきて、ホテルも困ったようだ。

一カ月にわたる大阪・梅田コマ劇場公演のミュージカル・ドラマ「屋根の上のヴァイオリン弾き」の、これがお恥ずかしい一役者の夜ごとの出来ごとなのだ。

歌って、踊って、はげしい芝居をして、終わったあとにアンコールが二十分近くもある。割れるような拍手の中で、舞台と客席は興奮の渦にまきこまれる一種の狂乱のような状態だ。アンコールには筋がない。ただ舞台に出てオジギをしていればいいわけだが、こっちの方も感情が高ぶって、涙がポロポロ出るし、胸はこみ上げてきて、しかも筋のないただ感謝の時は、どうしていいか、ほんとに私をとまどわせる。

何と、それが毎日つづくのである。しかもマチネーの日は週に二度あるのだ。
嬉しいことだが、体にこたえた。

＊

元来、私は図々しい人間というか、つまり図太いタチで、芝居で細かい神経をつかうわりにナーバスじゃない。よく食い、よく眠り、よく働く労働党だが、このライフワークともいえるべき「屋根の上のヴァイオリン弾き」には、三日に一度は深夜にうなされて目が覚めるのには往生した。声が出なくなる夢が一番多くて、次が舞台で突然ギックリ腰になる夢だ。起き上がれなくなつて客が総立ちになったりする。この場合はおおむね足のどつちかがコムラ返りを起こしているのだ。

ひとつも自慢じゃないが、今年で満六十五歳。昔ならコタツで隠居の年だろう。この年で完全体というのは無理な話で、どこも悪くないといっても全体にガタがきていることは間違いない。

それが激しい運動のくり返しで、しかも音楽ミュージックといつしよにこれが要求されるという反射神経の芸当ともいえよう。その上、悲しみ、怒り、と急激な精神の緊張がくり返されるのだから、気持ちよく耐えるにはいささか年をくいすぎていることは事実だ。

このミュージカルは一幕が幕なしで二時間、寸刻の休みもなくつづく。息セキ切って舞台の袖に入ると、フウフウいつている私の口に、衣装の小母おばさんが小さな二粒の心臓の菓をほうりこんでくれる。そして背中をさすってくれて、大丈夫ですか、ハイ、間もなく出ですよ、と勇気づける。

こんな様子は、人にも見せられぬ老優の哀れな図だ。

そして幕間が二十五分、楽屋でぶっ倒れていると、お客の面会だという。何という情け知らずの奴かと思いつながらも、旧友だ。どうでもいい話の相手をしなければならぬ。

「今、実をいうと役の人物になってるんで、この辺で失礼させてくれ」と言うのと、このひどい奴は、じゃビール一本飲んで帰ろうと、神聖なるべき楽屋を何と心得ておるのか。

つづいて第二幕が一時半ぶつ続けで始まるが、ある時、付いている弟子がタオルで汗を拭き、背中や胸をさすりながら、「先生、どこか拳闘の試合に似てますね」と、うがったことをいう。そういえば、リングのコーナーで、フウフウ一分間を待つ選手と、タオルでせつせと拭いているセコンドとたいして変わりが無い。しかし、終幕、荷車を引いて入ってくると、仲間が袖でおつかれさまと、拍手を贈ってくれる。これがうれしいのだ。実はその辺りからやれやれという気持ちと一緒に胸がつまってくる。

つづいて嵐のようなアンコールが緞帳どんちようの向こうから波のように聞こえてくる。

コールされることは最高の名誉なのだ。役者は何度でも出なければ礼儀に反することになる、と演出のサミイ・ベイスはきびしくおしえた。

二十分も拍手をすれば、する方も手が真っ赤になるだろう。終演後、楽屋を訪れたご婦人など「指輪のところが黒く内出血していて、何だか申しわけない気がしたこともたびたびだ。

しかし、これを役者冥利みょうりといわずして何というか。

その一日の芝居があとかたもなく雲散霧消して、完全燃焼した時は恍惚境といっているのだが、燃えきらなくて、いぶつたような残灰がのこるとやり切れない。

そんなミュージカル「屋根の上のヴァイオリン弾き」も、今年の二カ月を無事に終えると三百二十一回という日本では長期上演記録ということになる。もつともアメリカでは、毎日毎日、同じ劇場で十一年間上演したのだから、その回数も三千二百二十五回、「ハロー・ドーリー」の記録を破ったというから恐れいった話だ。それからゆけば、私たちは十分の一。

東京、名古屋、大阪、神戸、仙台、盛岡、八戸、函館、札幌と、まだ上演地も僅わずかだが、ただ一つ、私と一部の俳優は、最初から変わっていない。

アメリカでは、たくさんの俳優が主役（デヴィエ）を演やったが、オリジナル・キャストの名優で、しかもこの作品を作った一人ともいえるゼロ・モステルは惜しくも一昨年他界した。私よりし二つ下だった。

今年から、マチネーを週二回にしてもらったが、十年前はマチネーだらけだった。これを見に来たバイオリニスト、アイザック・スターンが、私の公演を見て、
「なぜ、こんなにマチネーが多いんだ。この作品は、こんなに出来るもんじゃない」
「私もそう思う」
「君にはセカンドがいるのか」
私の役はアメリカでは三人ぐらい変わりがついていて、
「いや、一人だ」
「それじゃメチャクチャだ。金をつまれて何回もやるのは淫売の仕事だ」
私はこのジョークに笑えなかった。ひどい形容詞だが、残念ながら、日本では回数契約ではない。一興行、まとめていくらのバナナ興行だ。

*

すでに十年前になるが、初演のプログラムを見ると懐かしい。
私の妻（ゴールド）は、まだ艶っぽい越路吹雪だった。今も十分艶はあるが、あんなに大人の匂いのしない女優さんだった。そして、今の女房の淀かおるが長女で、次女が浜木綿子、三女が西尾恵美子。四女がいしだあゆみ、五女が岡崎友紀で、この二人が子役としてつかわれたのも昔



日の感。

長女の相手役のモーターが市川染五郎、次女の婚約者パーチックが中丸忠雄、肉屋が故・山茶花究で、その先妻のお化けが黒柳徹子だった。この十年に死んだのもいるが、皆、素晴らしい成長をしたのが感無量である。そのうち越路吹雪はいろいろあったのだろう、東宝にアイソをつかして去り、日生劇場の女王となった。淀かおるや浜木綿子には子供が出来、いしだあゆみがブルーライト・ヨコハマを唄って売り出し、岡崎友紀が引っぱりだこのタレントさんになった。

批評家も、こつちが未熟だったせいもあるうが、日本ミュージカルの誕生に余りいい記事は書かなかった。が、不思議なことに外人記者クラブが見に来て、「ニューヨーク・タイムズ」や「ロンドン・タイムズ」に褒められたのは皮肉というか何というか。この最初の公演は帝国ホテルに大々的に広告を出したせい、外人客が多く、ロクに日本語も解せぬ連中だろうが（本場でみたのが日本ではどうだ、の好奇心もあったのだろう）、なかなかの見巧者で芝居を上手にもりあげてくれるのには驚いた。

「芝居は客席がつくる」を実感として味わったわけだ。どういうわけか日本のお客は、お行儀がよすぎて、時々、眠っているんじゃないかと思うことがある。事実寝ている芝居もあるが――。おかしくても笑わないし、悲しくても涙をごまかそうとする。もっと気にくわぬことは、手を叩くと悪いみたいな気がねをしていることだ。

金を払って楽しみにきているのに、我慢なんかは全く不要と思うが。

さて、帝劇だが、星移り人は変わって建物も三度ばかりその様子を新たにしたが。ここに流れた演劇史も色濃く変貌していった。

この舞台で松井須磨子が、今は艶歌となったカチューシャ可愛や、別れのつらさを唄い、島村抱月に恋慕して奈落で首を吊った大正の初め、今は故人となった左卜全も帝劇オペラの二期生としてポッカチオなんかをコーラスの中で唄っていたのも伝説のようだ。

時の帝みかどが行幸なされたかどうかは知るよしもないが、お堀の水面に貴顕紳士たちが色あやな華やかさを映したことは想像にかたくない。

名女優とうたわれた村田嘉久子、森律子などには逢った記憶はないが、ヨーロッパの大金持ちと結ばれた田中路子とは、戦後、旧帝劇時代に一緒に舞台に立ったことをおぼえている。

「今日は三越、明日は帝劇」のうたい文句まで流行した当時の帝国劇場だが、ちなみに書けば国立ではなく私立営業だったのだ。

*

芸能人というものから、容赦なく、汗と、疲労にまみれた金を大半まきあげる国だが、さっぱりその税金が芸能文化にかえってこない。僅かに国立劇場を建てて文化事業の申しわけみたいな

ことをしたが、その劇場とて、出資した役者の大半が出たこともないのが現状だ。私とてその一人だが――。

国が劇場を建てて、ただみたいな値段で貸すのは大賛成だが、芝居もよく知らぬ役人の古手が演劇行政をあずかるのには賛成しかねるのだ。

それに比べて今日の帝劇は、いわば、私の城だ。でも、あの劇場にも難点はある。それは後日にゆずつて、再び十年前の帝劇の話だが、ある日、楽屋受付からインタホンが鳴って外人の面会だという。このところ外国人の面会の多いのにまいていたし、マチネーと夜の間の貴重な時間なのでお断りしてくれといったが、いつの間にか青白い日本人が六階の楽屋まで上がってきた。彼は半分顔がかくれるような長い髪をかき上げて、

「アイザックが会いたがっているんです」

「？」

「今、これを観^みまして、ひどく感動して興奮してるんですが、お願いします」

「何する人なの？」

「バイオリニストですよ、ご存じないんですか」

ちよつと私を馬鹿にしたような顔をしたようだが、結局、余りの執拗^{しつよう}さに根負けして、

「じゃあ会いましょう。ただし、私はこれから風呂に入りますから、その間待って下さい。楽屋の入り口の隣にラショウモンという喫茶店がありますから、そこでしばらく……」

私は悠々^{ゆうゆう}と風呂に入りながら「またビューティフルか」とつぶやいていた。

彼らは私をつかまえると、おおむねは「ビューティフル！」の連発である。私のとぼしい中学英語では「美しい」の意だが、最高の賛辞ときかされた。

まもなく湯気をあげながら、喫茶店の戸をあけた。と、いきなりトシクリジャケツを着たマルセイユの酒場の親父みたいなのが飛びついてきた。

あわてたのは私だ。最近、外人客の中にめだつてオカマが多いので、「また、あれか」と、ギクツとしてやにわに突き飛ばした。

これは実に失礼な話であった。

彼は、うるんだような目で私を見ながら、

「あなたはユダヤ人だ」

「ノウ、日本人です」

「そんなはずはない。あれだけの表現が出来るのはユダヤの血が流れているからだ。私はユダヤ人だからよく分かる」

これには困りはてた。が、彼の目には涙さえ浮かんでいる。心のきれいな人だなとは思ったが、その場を早く去りたかった。

「ぜひ、友達になってくれ。私は今、文化会館で毎日稽古をしているが、いつでもあそこへ来てくれ。私は稽古をやめて、あなたにバイオリンを弾きたい」

それは有り難いが、「屋根の上……」でも弾いているから結構だ——と口まで出なかったが、かろうじて口をおさえた。

「もし、都合がつかなければ、ホテルへ来てくれ。私の部屋で君の望むだけ聞かしたい」

ホテルとはいささかクサイな、とフト思ったが、謝辞を述べて別れた。

私はそれから数年、おろかにもアイザック・スターンというのが世界一のバイオリン奏者だとは知らなかったのだ。

ある日、音楽家たちの集まる会で、笑い話にこの話をしたら、それからがいけなかった。日本一の馬鹿者あつかいで、そんな名譽をどう望んだって俺たちが求められるか、ピカソがお前の似顔を書いてやろうというのを、結構ですと断ったのと同じだ、と、しばらくは彼らの顔をさけたくらいにヒドイ目にあった。

それから八年。一九七五年、日生劇場で「屋根の上のヴァイオリン弾き」が再演された時、奇しくも来日していたアイザック氏が、私の舞台を再度訪れてくれ、その夜は、あの時存じ上げなかったことを頬^ほかむりして、親しく語り合った。

焼き鳥を食いたいという彼を連れて最後は兼高かおるの家まで襲い、深夜に至って偉大な芸術家の気どらないハダにふれたのだ。

彼はいう。

稽古は複雑で苦しいものだ。しかし、いったんステージに上がったら、演じる者はシンプルでなければいけない。

このシンプルという彼の言葉には単純と訳す以外の、もっと広く重い意味があるのだろう。感動というものは、その人間の内部にあるものではない。人と人との間にあるものだ、と彼は教えた。

後年、このことをフルトベングラーという偉大な指揮者の日記に見つけたが、あのアンコールカーテンの、舞台と客席の感動の渦は、なるほど両者の間に巻き起こった一つの連帯であることを、最近はつくづくと噛みしめるのだ。(※吉田脚注)

※

フルトヴェングラー 音楽ノート 芦津丈夫訳（白水社）

Wilhelm Furtwängler, *Vernächtnis*, F. A. Brockhaus, 1956

一九二九年

芸術とは非大衆的な事柄である。しかも芸術は大衆に向かって語りかける。不可思議なことは、最も単純なものは最も偉大な人によってのみ表現されるということ、そして最も複雑なものは街路に転がっているということである。

偉大さとは魂のうちにある。